

〈きっかけ〉
私は夏休みの2週間を利用して中国深センにある、日本の中小企業の中国進出を支援するテクノセンターという場所でインターンシップに参加させていただいた。孫安石教授からこのお話を聞いた時に、生活環境の厳しさや治安の悪さを聞いていたので初めは正直迷いもあり、参加を決意するのに時間がかかった。しかし今までの大学生活を振り返ってみて自発的に行動を起こすことがなかったのでは、積極的な自分に変える良いきっかけになるのではないかと思いついて参加を決めた。また就職活動を行う上で「働く」ということを、身を持って体験できると思ったからだ。

〈生活〉
深センでの生活は出発前にも聞いていた通り、全てにおいて圧倒された。以前中国へは、上海や

北京、南京など観光地であり発展した地域に行つたことがあったので、テクノセンターへ近づくとつれ「ここは同じ中国か」と疑ってしまうほど街並みも、衛生的な面でも大きく異なり愕然とした。膨大な量のゴミが至るところに捨てられていて独特な異臭を放ち、全体的に埃っぽく殺伐とした雰囲気にも包まれている印象を受けた。また治安もかなり悪いようで日本人が鞆を抱きかかえ、静かに目立たないようにしている光景はかなり異様だった。私たちが2週間泊まらせていただいた宿舎は、二段ベッドが6つ並べられていて、ベッドはベニヤ板にゴザを引いただけで、シャワーとトイレは一緒になっていてお湯は出ずに水のみ。洗濯は手洗い。このような環境で暮らすのはもちろん初めてで、かなりのショックだった。この生活が2週間も続くのだと考えたら、早く帰りたくて仕方なかった。しかし一方で隣の部屋のワーカー



部屋のベッド

さんたちが部屋を可愛くお洒落にし、当たり前のように明るく逞しくそこで暮らしている姿を目の当たりにして、自分が恥ずかしくなったり同時に、今まで自分たちがどれだけ恵まれていて何不自由ない生活を送っていたのかを強烈に痛感させられた。自分たちと同年代の女性がどのような環境で、どのように生活しているのかを知り、少しでも同じ環境で共に過ごすことが出来ただけでも大きな収穫であったと感じる。ワーカーさんとはテレビを一緒に見たり、お互いに何気ない質問をし合ったりしてコミュニケーションをとっていた。

外国語学部
中国語学科3年

三牧 絵里加

忘れられない2週間

次がアフリカ大陸最南端と言われる喜望峰。ただ、地図を見ても分かるが全然最南端じゃない。ただ有名なケープタウンにあり、有名な歴史人物も通った場所だから有名な場所にすぎなかったからだとか。ふざけすぎ。理解できません。まあ景色は申し分ない、自分がほんとにちっぽけな存在に見えてくるほどに豪快な大自然。大西洋とインド洋が混ざり合う場所。反対側に日本があると思うとますます不思議な気持ちになった記憶がある。ただこの場所、突風がハンパない。生えている木が斜めに生えてしまうほど、突風が吹き続けている。あまりたそがれている余裕もないのが現実である。



喜望峰

IN ナミビア

南アフリカの上に位置する国。ナミビア共和国。あまり知られていない国ではあるが、ここには世界で最も美しいとされているナミブ砂漠が存在する。ナミビアは交通機関が非常に少ない。旅をするならレンタカーを借りるかトラックでツアーするのが一般的である。僕はケープタウンから行

動を共にした3人でレンタカーを借りて出発。人生で一番幸せだと思ふ体験をした。何もない場所を何時間も時速100キロオーバード走る。信号もなくだれにも邪魔されることはない。上に乗って走つたりともうやりたい放題だった。こんな自由は日本では考えられないと思った。

ナミブ砂漠

首都のウィントフックは相当近代化されている。不自由な暮らしをすることができた。ただ、交通の便は非常に悪いので、余裕を持った行動が必要だ。

ナミブ砂漠に行くなら午前中に行くことを勧めます。午前の11時ごろには砂が熱くなり滞在困難になる。僕は旅の疲れかみな寝坊して着いたのが9時30分。1時間も引かないうちに引き返してしまった。それでも広大な景色に圧倒され表現しきれない自然に大感動した。しかし、ナミビアは夕方からが



ナミブ砂漠

本番である。まず、夕焼けの壮大な景色。これぞアフリカ！といった感じのオレンジ色した綺麗な太陽。暗くなれば空には星しかない。これは絶対に見ておかなければいけない光景だと思う。

僕は、旅を通して、視野を広げることの大切さを学んだ。世界には思いもよらない出会いが待ち構えている。これは誰が行っても必ず経験することができるといえる。経験せざるを得ない。なぜなら、1人ではどうすることもできないことが起こるからだ。そして、この出会いは、間違いなく世界が平和になる瞬間である。自国の常識にとらわれすぎて、他国を批判する。自国の非常識が、他国では常識なことがしばしばある。もちろん逆もある。視野を広げることが、平和にもつながると思つたとき、旅が好きになった。

今回の研修のなかで一番印象に残ってしまったのは、やはり反日デモを間近で見えたことだろう。尖閣諸島の問題がさらに熱を帯びている状況で、中国では9月18日は1931年に起きた満州事変によって「国恥記念日」となっており、私たちの研修期間と被っていた。連日テレビで日中関係のニュースが流れ、テクノセンターの方からも注意を促され、他人事ではなく身の危険を感じたの



ライン作業

と、自分が日本人であることを強く思い知らされた。様々な中国人の方と接してきて、以前まで抱いていた中国人に対する「冷たい」「自分勝手」というようなイメージが「優しく親切」「愛嬌がある」と良いイメージが変わってきたが、このような反日デモを見てしまい以前のイメージに逆戻りしてしまうようで困惑した。もちろん国家と個人はまた別物だと思うが、やはり小さい頃から植えつけられている反日感情はとて根深いものであり、同時に歴史や教育の怖さを肌で感じた瞬間でもあった。しかしそのような中でも、私たち日本人に親切に接してくれる中国人にも多く出会った。ある人が仰っていた「一度日本に来て、日本人と仕事をしたことのある中国人は過剰な反日感情を抱かない。」という言葉が印象的だったのだが、現にデモに参加している民間人のほとんどが今まで日本に来たことがなく、日本を学校やメディアでしか見聞きしたことがないという。お互いに誤解したまま敵対心を持ち、それにより民間人が犠牲になるのはとても悲しいことであり、あつてはならないことだと思う。国際関係は政治、経済とあらゆる思惑などが絡み難しい問題ではあるが、直接自分自身で日本をみてもらい少しでも考えがよい方向に変わってほしい。それは私たち日本人にも同じことが言えるだろう。

このインターンシップに参加し強く感じたことは、自分の目で見えて、耳で聞いて、自分なりに考えることがいかに大切かということだ。私たちの生活は多くの情報で溢れていて、さらにはメディアの表現によって人々の考えがコントロールされているように感じる。今回、実際に現地に行つて初めて気が付くことや誤解していることが多くあった。知っているつもりで、現状に満足してしまふことが一番怖いことであると思う。他にも経済やマネジメントについてなど新しいことを学ぶ機会が多くあり、とても面白く興味深かった。きっと大学の中にもいるだけでは学ぶことができなかったであろうと思ひ、知らないことを吸収し自分なりに考えを深めることの楽しさを改めて体感した。そして振り返ってみると、今まで何となく過ぎてきた大学生活の中で確実に自分を変えようとした。異国の地で適応していく力や、集団の中で協調性を持つて生活する力など数えきれないほどの素晴らしい体験をし、一回り成長することができた気がする。この経験を生かして広い視野を持ち、何事にも前向きに挑戦していきたいと思う。深センは、到着した当初は早く帰りたいと思つていたにも関わらず、いざ帰国してみるともつとあの場にいたかつたと思わせる魅力満載

まず、今回インターンシップに参加した学生のほとんどが商学部や経営経済学部（慶應大学、早稲田大学、関西大学、長岡大学ほか）だったの



C班のみんな

対して私は外国語学部なので、他の学生に比べて企業やマーケティングのことなどは、ほとんど分らなかつた。社長さんや工場長さん（D社、H社、P社ほか）のお話を聞き、中小企業がどのような状況なのか、テクノセンターが具体的にどのような形で中小企業の支援をしているのか、疑問に思つていたことを知ることができた。テクノセンターは日本の企業に対して施設を貸し、さらに労働力の確保や税関などの様々な業務の代行を行い、インフラの整備もしている。日本の企業はこのテクノセンターのおかげで、中国に進出しやすくなるのである。企業側はワーカーさんとのコミュニケーションを大切にしたり、どうしても生じる感性の違いを根気よく指導をしたり、細かい部分から工夫をし、より良い環境を作りマネジメントしているのだと感じた。そしてそういった現地で働いている方々は外から日本を客観的に見ている印象を持った。日本は元々敗戦から地道に「ものづくり」に力をいれ、また得意としてやってきたが、急速に経済が発展し裕福になりすぎ、高いものを売って高利益を得ることがばかりに目を向けてちがったが、初心に戻つて「ものづくり」の原点である、安く作つて売ることを意識することが大切であるとわかつた。お話を聞かせていただいた方々は皆、信念と誇りを持って仕事をなさつて

いて、とても若々しくバイタリティーに溢れ、圧倒されるほどであった。また工場の見学もさせていただいた。機械がずらりと並び大きな音が鳴り響いている所、手作業で点検作業をこなす所など種類は様々だが、そこで働くワーカーさんの仕事に向かう姿勢はどの工場に行つても同じだった。とても真剣で丁寧な作業をしていたので驚いた。普段中国製と聞くとあまり良い印象は受けないが、少なくとも私がそこで見たものはとても信頼できる質の良い製品を作つていて感じた。また社長さんや工場長さんからよく耳にしたのは、「中国人は日本人よりもよっぽど真面目に仕事をする。」という言葉だった。それは実際に働いている姿を見てすぐに納得できた。ある工場ではライン作業の体験をさせていただいた。半田ごてなどを体験したが、とても細かく一瞬たりとも気が抜けない集中力のある作業で、「ものづくり」の難しさと厳しさを実際に感じる事ができた。



工場長さんへのヒアリング

国内外問わずいろいろな旅行した人たちの旅行記はとでもたくさんあり、どれも違ったいろいろなスタイルがある。社会や世間体を無視して自分の道突き進もうとするカッコいいものや、笑いを意識して読んでいてその国に行きたくなるようなもの。どの本も本嫌いな俺でも読むことができる。そんな旅行記の中でも俺が最も好きな本は、さくら剛という人が書いた「インドなんて二度と行くか！ボケ!!でもまた行きたいかも」である。結構有名な本なので読んだことがある人もいるかもしれない。俺は大分この本に影響されているところがあるので、文章もこの本に似た部分が多々あるだろうがあしからず。俺はこの本を多くの人でにぎわう本屋で読んだ。出だししか読んでないのだが笑いを堪えきれずに盛大に笑ってしまった。皆さんに恥をかかないためにもぜひ買って家で読むことをお勧めします。

日本脱出
俺は品川駅が大嫌いだ。2011年2月1日、民俗学のテストをすっばかした俺は、品川駅のホームをうろうろしていた。この品川駅という駅は、京急線とJRの乗換駅で、人の歩くスピードが速く、ぶつかりそうになることも多いので飛行機で来た地方の人や外国人の人たちがまず、最初に東京の洗礼を受けるところではないだろうか。それに、一つのホームに違う行き先の電車が何台も止まるため、よく電車の電光掲示板と放送に注意していないと、成田空港に行きたいのにいつの間にか横須賀についてしまう。そうすると海軍カレーを食べて帰るだけになってしまう。なぜ、俺がこの大切なテスト期間最終日に品川駅にいるかというと、それはインドに向かうためである。この日の夜、12時の飛行機に乗って、タ

イのバンコクを経由してインドのニューデリー(インディア・ガンディー国際空港)に行くのだ。夜の12時ならテストを受けてからでも十分間に合うのだが、初めての海外一人旅にビビってしまった俺は、7時間前、すなわち、5時に家を出たのだ。自分でも感心する臆病さである。山手線で品川駅に着いたのまでは良かったのだが、ここで、どの電車に乗っていいのかかわからず、小1時間ほどタイムロスをしてしまった。しかし、おかげでホームの整理をしているおじさんと仲良くなり、前を通るたびに挨拶を交わすほどになった。何とか成田空港につき、3時間ほど瞑想をしたのち、無事にインドにつくことができた。この間、預けたバックにつけておいたバンダナがなくなっていたりしたが、多分それは盗まれたのではなく、バンダナが勝手に逃げ出したのであろう。インドの最初の印象は、国際空港だけあってと

外国語学部
中国語学科3年

川上 翔平

インド滞在日記

な場所であった。

最後に研修期間大変お世話になりました石井さん、西村さんをはじめ、テクノセンターの方々、各テナントの企業の方々に忙しい時間を割いて親切にご指導していただき心から感謝したい。



最終日の食事会にて



食堂の食事



テクノセンター オフィス内